

「ZAIDAN Report」第24号では、「特定非営利活動法人『飛んでけ！車いす』の会」様の活動をご紹介します。

日本で使われなくなった車いすを集めて修理を行い、海外旅行をする旅行者の手荷物として、発展途上国の病院や施設に、直接送り届ける活動を行っている、2025年度助成先の「特定非営利活動法人『飛んでけ！車いす』の会」様に取材を行い、その取り組みや新たなプロジェクトについて紹介します。

「特定非営利活動法人『飛んでけ！車いす』の会」様についてご紹介

沿革

| | |
|-----------------|------------------------------------------|
| 1998年5月 | 市民団体として発足 |
| 1999年12月 | 法人設立 |
| 2000年6月 | 特定非営利活動法人(NPO)の認証を受ける |
| 2010年7月～2015年6月 | 認定特定非営利活動法人 |
| 2014年3月 | (太陽生命厚生財団の助成により)「車いす利用者のためのバス乗車ガイドブック」作成 |

活動理念

- 本会のミッションは、①国内外の障がい者のQOL(Quality of Life; いのち・暮らし・人生の質)向上 ②ボランティア活動の促進です。近年は、車いす整備技術伝承事業にも力を入れています。

ー 公式サイトよりー

私たちが目指す社会

- * 私たちは障がいや国境の垣根を越え、誰もがその人らしく生きる社会の実現を目指します。

私たちの役割

- * 私たちは想いをのせた車いすを手から手へ届けることによって、障がいのある人が社会に参加できる機会を提供します。
- * 私たちは車いすを通じて、多様な人がつながる場、活躍する場をつくります。
- * 私たちは車いすを通して出会った人々の声を伝える、国境を越えた相互理解を深めます。

組織・運営体制

- 正会員：約100名、法人・賛助会員：約250名の合計350名です。
- 常時、整備やコーディネーター、事務を担っているボランティアは、高校生から80歳近い方まで約20名います。
- その他、寄付や助成等の支援・交流者を合わせると年間約700名の方が関わっています。

事業内容

1. 使われなくなった車いすを回収しリユースにつなげる活動：「くるくる！車いす」

- 日本国内で使われなくなった車いすを集め、整備・清掃を行い、コーディネーターが使う人の体格や使う場に合わせて選び、旅行者の手に託して、開発途上国の個人・団体・病院などへ届けています。
- 車いすはたくさんのボランティアの手から手へと渡り、旅行者が車いすを障がい児・者へ手渡ししており、その中で、たくさんの「顔の見える国際交流」が生まれています。
- この車いすのリユース(再利用)の仕組みは、寄贈されるという意味の“来る”と“くるくる回る”、リサイ“クル”から、「くるくる！車いす」とネーミングしました。
- この仕組みを通じて家庭の不用品になった車いすを本会が引き取り、修理・整備し、これまでの27年間で84か国(日本を含む)、約3,500台を送ってきました。
- 設立当初は、アジアの方々に届けることが多かった車いすも、今やアフリカや中南米にも広がりを見せており、2023年には、オールジャパンチームを結成しウクライナに1,000台以上の車いすを送りました(本会はそのうち100台を担当しました)。



【車いす整備の様子】

高校生(留学生)も整備ボランティアとして活躍しています。



*世界には7,000万人の車いすを必要とする人がいると言われていますが(WHO調べ)、日本のように障がいを有する方の補装具として支給される、または介護保険サービスで車いすがレンタルできる、いつでもどこでも車いすを買うことができる、という国はとても少ないのが実情です。
*車いすが手に入るチャンスが少ないことや車いすがないために、身体障がい者がなかなか外出できない、そうした人たちがたくさんいる、というのが実情です。

2. 海外現地での自立支援・技術協力

- 現地の障がい者団体と連携し、車いすを手渡すことで、彼らの社会参加や自立を促進します。
- ただ送るだけでなく、JICA「草の根技術支援事業」のプロジェクトを通じて、ネパール・インドネシア(ノリ島)・カンボジアにおいて車いす修理・整備の指導を行い、現地で車いすを使い続けられる環境を整えています。

3. 国内での普及啓発・地域交流

【車いす貸出事業「どこでも車いす」】

- 国内の必要な方へ車いすを貸し出す「どこでも車いす」事業を実施しています。
- 以前は会員サービスの一環として実施してきた事業を2021年度から一般の方々も対象に展開しています。

【車いす整備技術の伝承とボランティアの育成】

- 月2回「車いすの学校」を開催し、基本的な整備技術を伝承し、整備ボランティアになる方を育成しています。
- 平均年齢75歳を超えている、当会のボランティアのみなさんのリサイクル車いすの整備技術は、世界一だと自負しています。なぜならば、“もったいない”という日本人の意識と、そう思う世代であるシニアボランティアが最も活躍しているNPOだからです。
- 若いボランティアを入れて組織の若返りキャンペーンをした時期もありましたが、“シニアだからできることが大きい”“このNPOは元気なシニアの居場所になっている”との思いに至り、現在があります。

【広報・教育活動】

- 会報「とべとべ」の発行や、イベント・講演会を通じた国際協力の重要性の発信を行っています。



【車いす整備の様子】



【整備済の車いす】
整備を終え、寄贈を待つ
車いすたち。



【「車いすの学校」修了式】

また一人シニア整備士の誕生です。



【車いす整備
ボランティアリーダー】

【大活躍のシニアボランティアのみなさん】

【整理整頓(Seiri Seiton)】

【①整備道具】

整理整頓の概念のない国もあるので、研修生用にローマ字表記で工夫しています。



【②リサイクル部材】

貴重な部品なので、きちんと分別してリサイクルします。



日本における課題

- 車いすの入手については、恵まれたこの日本でも大きな課題はあります。
- 一般家庭で不要になった車いすの80%が大型ごみとして捨てられ、スチール部分はリサイクル資源として再利用されますが、貴重なアルミニウムは、ただのごみとして捨てられているのが現状です。
- 札幌市だけでも、年間約500台の車いすが捨てられています。そのうち約100台は、リユース可能であると考えています。
- そこで札幌市と「車いすのリユース活動促進に向けた連携協定」を締結し、不要になった車いすのリユースと廃棄削減を推進しており、2024年は、試験運用という位置付けであったものの、39台をリユースし650kgの大型ごみの削減に貢献しました。
- 2025年度から本運用となり、年間約100台のリユース体制が整備されます。



【札幌市との車いすリユースの連携協定締結】

今回の助成申込に至った背景

- これまでの当会における支援活動の対象は、主に海外の障がい者でしたが、地域の実情をつぶさに見ていくと、制度の狭間にある課題が浮かび上がってきました。
- 災害大国日本においては、平時であれば車いすに頼らなくても活動ができる高齢者や障がい者の方も、迅速な避難が必要な有事においては、車いすが必要な災害弱者になってしまいます。
- 現行の社会福祉制度のもとでは、財政面の問題で有事に使える予備用の車いすを各施設等に備え付けることが難しく、災害時における避難活動に大きな支障となる懸念がある、ということがわかりました。
- そこで、リユースの仕組みにより整備・清掃した車いすを、災害時に地域住民の避難のために必要となる可能性がある市内の商店街や町内会、団体などへ「災害用車いす」として寄贈する、というプロジェクトを創立25周年記念事業「お助け！車いす」として立ち上げました。



助成事業の成果

- この冬は整備作業をすすめ100台以上のオーバーホールを完了しました。「お助け！車いす」事業は、スタートしたばかりで寄贈数はまだ少ないですが、送り先にはとても喜んでもらっており、災害発生時に地域住民が使用できる車いすの配備を通じて地域の防災力向上に貢献できていると考えています。
- 今回は災害時に使用する車いすを寄贈することになりますので、いざというときに使える状態にしておく必要があるため、可能な限りノーパンクタイヤを取り付けることにしました。
- 車いすは多種多様です。一般の方がイメージする自走式のみだけでなく、介助式、バギー型、リクライニング型、ティルト型、ティルトリクライニング型などのバリエーションをもって選んでいただいています。
- 特にリクライニングなどは、身体障がい者だけでなく、末期の認知症の方にも必要になってきますので、老人保健施設や認知症グループホームのご要望が多いと思います。
- また、私たちは車いすを安全に安心して使っていただくために、寄贈先に車いす整備マニュアルを差し上げて、整備して使うことの大切さを伝える整備・点検文化の醸成も併せて推進しています。
- 本会は、発足以来、愚直なまでに車いすの清掃・整備・点検をして、その車いすが全世界に貢献するように活動してきましたが、この「車いすを整備し、必要なところに寄贈する」という不断の営みの繰り返しこそが私たちにとってかけがえのない成果であり財産であると考えています。



集配ボランティアの協力で寄贈先へ車いすをお届けします



【整備済みの車いす】
ステッカーを貼って寄贈先へお届けします。

今後の抱負など...

- 2025年10月以降は、寒さ厳しい札幌市では車いすの寄贈は緩慢になりますので、この冬は整備作業をすすめ100台以上のオーバーホールを完了し、災害時避難用の車いすとしてきました。まずは100台分の寄贈を引き続き行ってまいります。
- また、この仕組みがどれほどサステナブルで地球環境に優しく、人間の住む環境を守るか、についても体現する活動をしていきたいと思えます。
- 本会が整備・点検を担い続ける限り、まだ使える車いすを捨てるといった「もったいない」がなくなればと願っています。本会、車いすを必要とする人、世間(世界)の三方よしが、サステナブルであることが、私たちの一番の願いです。